

陳 述 書

2020年8月10日

原 ミ ナ 汰

1 はじめに

私は、NPO法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク（以下「共生ネット」といいます。）の代表理事をしています。

私自身のセクシャル・マイノリティの当事者としての経験や、私がこれまで行ってきた支援活動についてお話します。

2 共生ネットの活動

共生ネットは、セクシュアル・マイノリティ全般に対する根強い社会的偏見を取り除き、当事者とその家族・友人が安心して生きられる社会を実現することを目的として2008年に発足しました。主たる活動としては、当初から議員や省庁などへのロビー活動を通じて、国や地方自治体に対して、共生社会の実現に向けた政策提言等を行い、自治体主催の講演会等を通じて施策の導入を働きかけてきました。現在、渋谷区や世田谷区等計9つの自治体のセクシャル・マイノリティに関する相談・支援・交流事業の受託と事業協力をしています。また、自治体の協力を得て、多様な性を生きる人々を支える相談支援員養成研修を企画・実施しています。

3 私の性自認・性的指向

私自身の法律上の性別は女性ですが、私は、女性としての性自認をもったことはありません。ただ一方で、自分が男性なのかと問われると、そうであると答えられません。

そのため、私は40代のころから、自分の性自認に関してトランスジェンダーであり、その中でも「Xジェンダー」という呼称を使うこととしてきま

した。Xジェンダーとは、出生時に割り当てられた性別である女性あるいは男性のどちらか一方には収まりきれない性自認のあり方をいいます。

また、私の恋愛の対象はたいてい女性です。法律上の性別だけでいえば「同性愛者」であると周りからは思われるかもしれませんが、しかし、前述のように、私自身に「女性」であるという性自認はないので、私は自分の性的指向を「同性愛」と呼んだことはなく、強いていえば「女性愛」かなと思っていました。

4 幼少期から抱えていたセクシュアリティに対する疑問や違和感

私は1956年（昭和31年）に、東京都渋谷区で生まれました。祖父母と両親、姉一人、兄一人という家族構成で、両親が共働きだったため主に祖母に育てられました。

私は、2、3歳のころから、自分の身体や自分の性別はなんなのだろうという疑問を持っていました。祖父に、「どうして自分にはお兄ちゃんと違ってチンチンがないの？」と質問したら「そのうち生えてくるよ」と言われたのを覚えています。子どものころの写真を見返すと男の子と一緒に写っているものが多く、近所のお兄ちゃんや、年下の男の子が遊び友達でした。このころにはすでに、自分はいわゆる「女の子」ではなく、むしろ男の子なんだという自覚が芽生えていたのだと思います。

性的指向に関しては、幼稚園の女の先生のこと大好きだった記憶があるので、そのころから自分の恋愛感情は女性に向けられていたのかもしれませんが。

そのころは、男の子の友達が多いことや幼稚園の先生が好きなのは、あたりまえで、それに特に違和感はありませんでしたし、これといって問題なく過ごしていたと思います。

ただ、性別のことが不思議で、自分は何者なのかという疑問をもち始めていました。社会の仕組みや身体の性、生殖などについて疑問を持ち、親にも質問を投げかけていましたが納得できる説明をもらえないでいました。自分

は大きくなったらどんな大人になるんだろうと、彷徨っているような気持ちでした。

5 アメリカで過ごした小学生時代

1964年（昭和39年）私が小学校二年のとき、母が学位を取るためにアメリカ留学することになり、私と兄が連れられて行くことになりました。

アメリカに渡ってからは、農家やキャンプなどの外遊びに夢中で、男か女かなど、性別の区分を意識することはあまりありませんでした。むしろ文化や「人種」の違いを意識させられたように思います。当時アメリカの田舎では戦争の後遺症がまだまだ残っていて、日本といえばかつての敵国。日本人自体少なく、子どもとなるともっと珍しかったことでしょう。その頃は、黒人と白人は住まいも交通機関もトイレも別々という時代で、私はどちらに属すのかよくわからないまま、「小さくて髪の高い東洋人の子」として暮らしていました。

6 日本に戻ってからの生活

(1) 女か男かで生き方が決められてしまうことの息苦しさ

1967年（昭和42）年、私が小学校高学年に上がるころ、母が留学を終え日本に戻ることにになり、私も一緒に帰ってきました。日本に戻ってからの生活は辛いものでした。アメリカでの生活では、英語にはいわゆる「女言葉」もなくそれに馴染んでいたのに、日本に戻ってきてからは「わたし」を使いなさい、スカートを履きなさい、女の子らしくしなさいといった生活になったからです。女子トイレに行くことも躊躇われるようになり、膀胱炎に罹り腎臓を悪くしてしまいました。親が心配して様々な病院に連れて行ってくれましたが原因不明でした。東洋医学の医師に頼っていましたが、そこでも陰と陽という考え方があり、それを杓子定規に男と女にあてはめる先生にも違和感がありました。

学校の授業や活動で性別による区分けがあることも、私にとっては強い違和感がありました。

例えば、私の中学時代には、女子は家庭科、男子は技術というふうに、性別によって男女が分けられる授業がありました。私個人としては、のこぎりやトンカチを持つ方が性に合っていましたので、技術の授業を受けたいと思いました。しかし、それを言うと、周りからは「信じられない」という反応をされました。私が思ったことが良い・悪いというよりは、そもそもそういう考えをもつこと自体がありえない、という反応でした。また、私は小さいころから兄と野球をしていたのですが、中学生になると女子だけソフトボールをやらされることも疑問でした。授業以外の場面でも、男は委員長、女は副委員長といった区分けがされており、それに対しても強い違和感を持ちました。

そして、そういった区分けは大人になってからもあまり変わらないのだということがだんだんとわかってきました。

例えば、女性が結婚し、子どもを産むことは、その当時は当然のこととされていました（私の祖母は、10代前半にすでに祖父との結婚が決まっていた、16歳のときに祖父と結婚したといえます）。

また、私の祖母や隣近所でも、夫から暴力を振るわれたり、離婚をしたときには子を置いて家を追い出されたりする話を、よく見聞きしていました。それにもかかわらず、どうして女性が結婚・出産をすることが当たり前とされているのかについて、私は強い疑問を持っていました。

私は、身体的な性別によって、その後の人生がすべてひとつのパッケージとして決まっているんだ、「メス」として生まれたことで生き方が決められてしまうんだと絶望感を感じました。そして、今感じている生き辛さがこの先も続いていくのだと考えるようになりました。

(2) Xジェンダーの意識の芽生え

私は思春期には、明確に、自分の内面と、自分の外見が「女の子」であることとの間にずれを感じていました。ただ、自分の身体への拒否感を持ったことはありません。胸が大きくなるなどのいわゆる女性らしい身体つきにならなかったのも幸いだったのかもしれませんが。一方で、自分が「男の子」であるという確信も持ってはいませんでした。思春期の第二次性徴のときに周りの男の子と同じようにならなかったことで、自分は男の子とも違うということも自然に受け入れるようになりました。当時は、セクシュアル・マイノリティの認知度も低かったこともあり、ロールモデルとなる人物もおらず、自分がなれそう、またはなりたいと思える男性像がイメージできなかったのも男性の性自認を持たなかった要因かもしれません。このように、女でも男でもないヒト（X）であるという自覚が増して行きました。

交友関係としては、男の子の集団で過ごすことが多かったのですが、女の子とは、特定の一人とペアになって、いつも一緒にいることが多かったです。そういうふうに仲良くなった女の子に対しては、恋愛めいた感情を抱いてはいましたが、それを言えば驚かせてしまうと思い、はっきりと気持ちを伝えたことはありませんでした。

そういった性自認や性的指向に関することについて、誰にも打ち明けることもできず、十代の私は日々、自分がどうすごせばいいのかを悩んでいました。

母は社会学を専攻していたため、家には社会学や性に関する本がたくさんありました。私は、自分の疑問に対する答えを求めて、それらの本を読み漁りました。本の中には人間の発達モデルが書かれていましたが、自分にはそこにかかっている典型的な発達には当てはまらないので、自分が外れているのか、その教科書が間違っているのか、と疑問は益々深まりました。親に自分の悩みについて相談することを考えたこともありました。しかし、母が持っていた本には、典型的な発達モデルにあたらぬ状態は「病気」や「逸脱」とされており、自分の状態を母に言ったら病院に入れられると

思っていました。母にもし自分の悩みを受け入れてもらえなかったと思うと、怖さを感じていました。それは、当時の私にとって非常に恐ろしいことでした。そのため結局、親に相談することはできませんでした。そして、15歳ごろから、私はだんだん学校に行かなくなり、家に引きこもるようになりました。

7 高校時代の危機的状況

1972年（昭和47年）、高校に上がってから、心身の調子はさらに悪くなりました。あらゆる場面で身体的性別を基準とする日本の学校で、自分のやりたいことをすると、ことごとく反抗していると受け取られ、このままでは暮らしていけないという思いが日に日に増して、精神的にどんどん追い詰められていきました。

高校入学後、祖母が亡くなるという出来事がありました。祖母は私にとって大きな心の支えであったため、それは、もともと弱っていた私の心に、さらに追い打ちをかける出来事になりました。

そのころの私は、自分が生きているのか、死んでいるのかもわからないような状態にありました。人生で一番の危機だったと思います。毎晩、夜になると自分の魂が天井にふわりと上がって、勝手に下を見下ろしているような状態が続き、怖くて眠れなくなる、今思えば、解離や離人感を経験しました。10代の子には、衝動的に自殺をしてしまう子がいますが、自分もそういう子たちと同じような精神状態になっていたのではないかと思います。

私も、自分なりにいろいろな宗教やカルトなど、何か自分の救いになるものがないかを探しましたが、そこに救いを見出すことはできず、結局、誰も助けてくれない、自分でなんとかしなければ、という考えに至りました。

そこで私は、日本を逃れて、海外に出ることを決意しました。

8 フィリピンで多様性に触れる

1973年、17歳の夏、母が仕事でフィリピンに行くことになったため、私もお願いして、同行できることになりました。

フィリピンの人々は、自国の公用語の他に、自分の故郷の言葉と、英語と、人によってはスペイン語も、といったふうに、いろいろな言葉を話していました。そういう言葉の面で、日本とは大きく違うと感じました。

また、それまで私は、日本とアメリカの言葉や習慣や価値観の違いに悩んでいた面もあったのですが、フィリピンという、自分にとっては第3極ができたことで、日本ともアメリカとも違う視点に気づき、多様性の大切さを感じるようになりました。そして、アメリカか日本かという二元論に自分が引き裂かれる必要はなく、自分は自分なのだと思えることができるようになりました。

恋愛関係については、現地である女の子と仲良くなり、一緒によく出掛けたりする関係になりました。その子に対しては、はっきり恋愛感情を持っていました。ただ、その子の家は厳格なカトリックの家庭で（カトリックは同性間の恋愛に対して非常に厳しい考え方をしています）、その子の両親は娘の交友関係について非常に厳しい人たちでした。そのため、その両親から強く反対されることが目に見えていたので、自分の気持ちを本人に伝えることに躊躇しました。そのころは、片想いはたくさんしましたが告白する勇気は持てないでいました。

9 スペインで味わった苦悩

フィリピンでの生活で日本にはない多様性に気づき、少し元気になった私は、日本で生活する気になれず、10代の終わりの1975年（昭和50年）ころから、スペインで生活するようになりました。まずは大学のスペイン語学科で言葉を学び、その後ジャーナリズムを専攻しました。

スペインで暮らし始めてからしばらくは、私は自分の性自認について特に隠すことはせず、素朴にオープンにしていました。特定の女性に対して、自分の気持ちを伝えることもありました。しかし、スペインもカトリックの国

であり、当時は同性間の恋愛に対して非常に厳しい社会だったので、私は周りからひどい非難を受け、いわば危険分子のような扱いをされました。そういう経緯があつてからは、スペインでも、自分の性自認や性的指向について周りに言わないよう気を付けていました。

そのころのヨーロッパには、フェミニストやレズビアンの集まりや、お店がありました。私は関心があつたのですが、行くことができませんでした。Xジェンダーで、日本人で、女性に性的指向が向く自分にとって、女性だけの集まりは自分が行くところではないように感じたのです。スペインでの体験から、私は、世界中どの国でも生きていけないのではないかと考えるようになっていました。このころは私にとって第2の危機といえるものでした。

10 出産の体験により自分らしさに気づく

このように、自分を受け入れてくれる場所はないと感じていたため、未来に希望が持てず、生きていても仕方がないという思いを募らせていたのですが、前々から、私のなかには、妊娠・出産を経験したいという思いがあり、それだけは人生の中でしてみようと決意しました。

そこで、子どもを作ろうと、親しいゲイの男友達に頼んでみましたが、残念ながら承諾してくれる人はいませんでした。それで、周りにいたゲイではない男性と初めて交際することにしました。その人には、付き合う条件として、子どもが欲しいということを伝えると、相手の男性は了承してくれました。

その男性と付き合い始めて間もなくして、運よく妊娠しました。

しかし、女性用トイレにも行くのさえ気恥ずかしいと感じる私が、産婦人科に行くことには強い抵抗がありました。子どもを家で産めないかといろいろと調べてみましたが、残念なことにスペインでは、家で出産することは法律で禁止されていたのです。そこで仕方なく、イギリスで出産することにしました。

子どもの父親にあたる男性には、子どもは自分で産んで育てるから、あなたはあなたの好きな人と、好きな人生を歩んでくださいと伝えました。しかし、彼は子どもを産むところには立会いたいと言ってくれたため、出産のために一緒にイギリスに行きました。

そして、私はイギリスで子どもをどうにか無事に出産しました。頼んでいた助産師さんが出産に間に合わず、男性医師と子どもの父親にあたる当時のパートナーが赤ちゃんを取り上げてくれました。私が25歳（1981年（昭和56年））のときでした。

女性としての自認がないにもかかわらず、妊娠や出産を経験したいと考えたことは不思議に思われるかもしれません。おそらく私は、妊娠や出産という「女性としての体験」をすると、自分がどういう気持ちになるのかを知りたかったのです。

結果として、子どもを産んだことで「お前はこれでいいのか」という自分自身の性別に対する葛藤はほとんど解消しました。子どもを産む前と産んだ後で、自分の性自認がまったく変わらないのを確認したからです。妊娠・出産したからといって、私に「女性」としての自認は生じませんでした。子どもの授乳期間中は、一時的に自分の中で「これが女性らしさかな」と強く感じることもありました。言葉では表現できないのですが、自分の体の中で、ホルモンの増減などの化学的な変化があったように感じました。しかし、子どもが離乳期に入り、母乳が出なくなると、自然とスーッと元の自分に戻るような感覚があり、やはりこちらが本来の自分だと感じました。

以前から私は小さい子どもや動物や植物の面倒をみるのが好きで、もともと母性のある方だと思っていましたが、それは「女だから」ということではないと確信しました。出産という経験を経て、女でも男でもない、あるいはどちらでもある、これが私だ、これでいいんだ、と心から思えるようになりました。

それまで日本の家族にはたまに手紙を書く程度でしたが、自分が妊娠・出産したことを両親らに伝えると、予想外に喜ばれ、非常に歓迎されました。子どもを作るとこんなに喜ばれるのかと驚きつつ、私は子育てのために日本に帰ることを選びました。

子どもの父親にあたる男性も、一緒に日本に来ることになり、彼は日本語を一から学んで、日本で生活を始めました。

ただ、前述したように、私に女性としての自認はなく、かつ、自分は女性に対して恋愛感情が向きます。そのため、自分が「女性」として「男性と」結婚したいと思ったことはありません。そのため、子どもの父親と結婚することは考えられませんでした。彼とは子どもが3歳になるまでは一緒に暮らしましたが、その後は別居しました。彼は私たちの家の近くに住んで、週末は子どもと一緒に過ごしました。ちなみに、彼はその後も日本で暮らしていて、今でも子どもや孫を通じて、家族的な協力関係が続いています。

1.2 子どもを通じた交流により社会へ根付いていった

日本で子育てをしていくなかで、子どもを通じた母親どうしのコミュニティがあることを知りました。女性のコミュニティにはじめて触れ、日々のご飯を作ったり、お茶を飲みながら子育てについて話をしたり、何気ない日常を過ごしていくことで、ようやく日本の社会に根付いていける感じがしました。日本でも暮らしていけるかもしれないと初めて実感できました。

また、子どもが20歳くらいになるまでは、しっかり養い、育てなければという、生きるための目標ができたことも大きかったと思います。そのおかげで、自分がどんな仕事をしていくかなど、これまで漠然としていたことを具体的に考え始めるようになりました。

出産・子育てを通じて性自認への葛藤も解消し、社会に初めて根づく感覚を持てたことにより、私はようやく自分を受け入れることができ、セクシャル・マイノリティのコミュニティに参加したいと思うようになりました。

1.3 セクシュアル・マイノリティのコミュニティとのつながり

まず初めに、新宿二丁目にあるゲイバーで月一回「女性オンリーの日」があることを知り、女友達を誘って参加しました。1984年、子どもが3歳の頃のことです。最初は声をかけられたらどうしよう、と不安で一杯でしたが、勇気を出して参加してみると、すぐに話が弾んで友達ができ、そこから積極的に人と関わるようになっていきました。

最初に参加したのは、レズビアンコミュニティでした。女性としての性自認がないため、長年女性のコミュニティに参加することができずにいたのですが、今思えば、出産・育児の経験を通じて、女性との繋がりを持つことができたのが、参加できるようになったきっかけだったのではないかと思います。

ただ、コミュニティには子どものいるレズビアンはそれほどいませんでした。実際には、男性と結婚しているレズビアンの方はたくさんいても、生活の中で自由な時間がなく、レズビアンのコミュニティに参加できない人も多いことが、後からわかりました。

とはいえ、少しずつ子どものいる女性同士のカップルとも知り合うようになり、子どもを連れて一緒に海水浴やキャンプに出かけたりしていました。

そのような中で、最初のパートナーと出会いました。

1.4 最初のパートナーとの生活

最初のパートナーとは、子どもが3歳、保育園児のころに出会いました。子どもとよく遊んでくれたため、この人となら三人で一緒に暮らしていけると感じ、パートナー関係になりました。1984年から1993年まで、10年ほど一緒に暮らし、共に子育てもしました。私もパートナーも働いていましたが、家事などではお互いに助け合い、「お母さんが二人いていいね」と周りから言われることもありました。

最初のパートナーとの関係について、親族の理解はなかなか得られませんでした。相手の両親は反対をされていて、いい顔をしませんでした。私の両親

についていえば、母は仕事人間で、単身赴任などで家にいることがほとんどなかったため、特段ぶつかったりはしませんでした。父については、私とパートナーとの関係ははっきり伝えずに、一緒に暮らしていました。父が私たちの関係について内心でどう思っていたのかはわかりませんが、パートナーがご飯を作ってくれて、父はそれに対してとても感謝していて、基本的には良好な関係を築いていました。結局父には、亡くなるまで私の性自認や、私とパートナーの関係について、はっきりと言葉で説明することはありませんでした。

私がパートナーとの関係を、親きょうだいに初めて打ち明けたのは、父が亡くなり、その葬儀のため家族全員が集まったときでした。

女性のパートナーと暮らし始めてから、2年ほど経過していました。

家族には、自分の性自認のことについては詳しくは話しませんでした。とにかくその人が自分の大切な「伴侶」であることと、父の世話をしてくれて、いろいろとお世話になったから、お礼を言ってほしい、と伝えました。

それに対して、母と兄はただ無言で聞いているだけで、私たちの関係を受け入れてはくれませんでした。唯一私の姉だけは、私がパートナーとどこで出会ったかなどのお話をいろいろと聞いてくれて、私たちを受け入れてくれたようでした。姉は、ずっとオーストラリアに住んでいて（その時も、父の葬儀のために一時帰国していました）、向こうにセクシュアル・マイノリティの友人がいたので、他の家族より先に、私とパートナーの関係を受け入れることができたのだと思います。

1.5 最初のパートナーとの別れ

父が亡くなってから、約8年間そのパートナーと一緒に生活しました。

当時のパートナーとはレズビアンコミュニティで出会ったこともあり、私はあくまで「女性」として、その人とつきあい始めました。特に、自分には子どもがいたので、周りも自分のことを「女性」として見ていましたし、そう扱われました。

しかし、私は本来トランスで「女性」としての自認がないため、女性としての役割を演じることが、自分の中でだんだん苦痛になっていきました。

レズビアン女性の中には、男性に対する忌避感をもつ人もけっこういて、男っぽい自分を隠さなければならないことも多くなりました。例えば、話し方ひとつとっても、「女性」としての役割を求められているのに、「男っぽい」話し方やふるまいをすると、それは非難の対象となります。

そういうことが重なり、パートナー関係を窮屈に感じるが増えていきました。

それに加えて、子どもが思春期に入って反抗期が訪れたこともあって、結局、関係を作ってから10年くらい経ったころに、最初のパートナーとは別れることになりました。私が39歳のときでした。

いまから思えば、同性婚や仮にパートナーシップ制度でも、何らかの社会制度に家族として守られていたなら、お互いのストレスも違っていたのではないかと思います。

1.6 別れることの困難さ

パートナーと「別れる」という作業はいろいろな面で苦労が多かったです。

実質としては「離婚」ということにはなりますが、法律上同性どうしのカップルのため当然法的なシステムやルールは何もありませんので、財産をどうするかなど、一から自分たちで話し合っ決めてなければなりませんでした。

私たちの場合は、例えば、お互いに何かあった時のために、個人の口座と別に、二人で出し入れできる口座を作っていました。その口座に、お互いの収入の何パーセントかを入金して、そこから生活費等を出すことにしていました。パートナーとの別れを切り出したのは私からだったため、パートナーにその口座を渡し、引っ越し費用などに充ててもらうことにしました。

そういうふうにして、私たちは何とか話し合っ納得の上で別れることができましたが、法的なシステムが整っているなかで別れるのと、まったくルールが何もないなかで別れるのとでは、かかる労力が大きく違うと思います。

法的な結婚ができないことは法的な離婚もできないことなのだ、と痛感しました。

1.7 現在のパートナーとの生活

現在のパートナーとは、私が48歳のときに出会い、一緒に暮らし始めて早15年以上になります。当時、私が「原ミナ汰」と名乗りはじめ、自分がトランスジェンダーであることをオープンにし始めたころに出会いました。彼女は、私がトランスのなかの「Xジェンダー」であることを受け入れています。同性愛とも異性愛とも言い切れない「ノンバイナリーな（二元的でない）」組みあわせで、自分たちってなんなのだろうね、と話をすることもあります。ケンカはしょっちゅうですが、女性どうしのカップルではなく、トランスジェンダーとして初めてパートナーシップを築くことができ、その意味では安心した生活を送ることができています。

1.8 セクシュアル・マイノリティ等支援の取り組み

ここからは、私がセクシュアル・マイノリティ当事者としてあるいは支援者として関わってきた活動についてお話しします。

(1) レズビアンコミュニティの立ち上げ

日本では男同士の愛や強い結びつきは「衆道」などという言葉で歴史的に認知されていたのに比べ、女性同士の恋愛関係は「単なる友情の域を出ず、異性との関係を超えない二次的なもの」と考えられており、1980年代にいたっても、女性学の研究者までが「日本にレズビアンはいない」と公言するような状況でした。東京にも、男性同士が出会うゲイバーはたくさんありましたが、女性だけで飲める店は、あっても2～3軒でした。そのため、1987年、私は最初のパートナーやそのほかの仲間たちと、「れ組スタジオ・東京」（以下、「れ組スタジオ」という）というレズビアンが集まるコミュニティを作って活動することにしました。

当初は、夜の街である新宿二丁目とは違う、昼間に交流できる場を作ろうという思いから集いをもつようになり、公共施設を借りて交流会や合宿などを行っていました。しかし、参加者の親から、活動を妨害する投書があったり、主催者のところに脅迫電話がかかったりするといったことが頻発したために、その防衛手段として、活動のなかで個人の連絡先を使わずに済むように、新宿区荒木町にあった「JOKI 女性解放合同事務所」の一角を借りて、れ組スタジオを開設しました。

そこでは、月一回「れ組通信」というニュースレターを発行し、全国に散らばる読者に届けていました。また、毎月交流会を実施、年数回ある連休にはレズビアンのための合宿の運営に協力していました。1992年にはアジアレズビアン会議と銘打って埼玉の国立婦人会館（現在の国立女性会館 NWEC）でのべ300名以上が参加する国際会議を開催しました。会の活動と並行して、個人としても徐々に活動の幅を広げ、女性だけのディスコなどの様々なイベントや、お店を開いたりして、居場所づくりの活動をしていました。

しかし、最初のパートナーとの別れをきっかけに、私はれ組スタジオの活動から抜けることにしました。自分の多様な性別感覚について話してもなかなか理解が得られず、「女性だけの」という限定がついた活動に対する違和感が増していったことも理由のひとつでした。

(2) 性暴力被害者支援活動

私の支援活動の柱の一つに性暴力被害者支援があります。

実は私自身、幼少期のころ、外で遊んでいるときに見知らぬ若い男性から首を絞められ、性的暴行を受けたことがありました。自分自身の性自認や性的指向について悩んでいた10代のころは、「同性愛等の性的逸脱が生じるのは、こうしたトラウマが原因」とまことしやかに言われていた時代で、そのような言説にも重ねて苦しめられていました。

しかし、セクシュアル・マイノリティ当事者の私からすればそれらの言説が自分には当てはまらないことは明白でした。私について言えば、幼少期の暴行事件の前から自分の性自認について違和感を持っていました。そして、そういった「後天的原因説」が、セクシュアル・マイノリティに対する無理解の原因のひとつとなっていると感じていましたが、それを証明する手立てがありませんでした。そこで、自分の眼や耳で確かめる活動を始めたのです。

具体的には、世の中に正しい情報を発信するために、性暴力被害者の体験を語り合う取り組みとしてセルフヘルプグループ活動を始めました。この活動の一つとして、訳書『生きる勇気と癒す力』（三一書房）があります。

性暴力被害に遭っても、誰にも話せなかったり、話そうとしても周りに止められたりするせいで、世の中に知られていない被害というのがたくさんあるのだということを改めて知りました。また、性暴力被害にあったからといって、もともとの性的指向・性自認が変わるわけではないということも再確認しました。例えば、何かの被害がきっかけで、次から似たような状況を避ける、ということはあっても、異性愛者の女性が、性被害にあったからといって、急に男性に対して恋愛感情が向かなくなるというわけではありません。加えて、性暴力被害が女性だけに起きるわけではなく、男性も被害に遭っていることがわかってきました。加害者は常に自分との力関係をみていて、自分が反撃されなさそうな対象、自分より力が弱そうなものに加害を向けるからです。

この活動を通じて、多くの人が想定できる受け入れやすい事象以外は見えないものにされてしまうということを痛感しています。見えにくいのがゆえにいないものとされて、ケアされず、生きたい人生を生きられずに苦しんでいる人は、多くいます。

(3) 共生ネットの活動

私は2008年2月（当時52歳）に、共生ネットを立ち上げました。私を含めた10名くらいが発起人となりました。

それまで、サークルや民間の団体でセクシュアル・マイノリティの支援活動をしてきましたが、それらの活動のなかで見えてくる課題が、広く社会に伝わらず、国や自治体の政策に反映されないことに問題意識を持っていました。

そこで、国や自治体に対して政策提言や要望を行うルートを作ることを目的に、共生ネットを立ち上げました。

2012年3月から2016年3月までの四年間は、一般社団法人社会的包摂サポートセンターが主催する「よりそいホットライン」のセクシュアル・マイノリティ専門回線での電話相談業務を受託しました。多い時には、約100名の相談員を統括する業務をしていました。

ただ、それは全国規模の活動であるため、身近な場所に相談の場がないということに課題を感じました。そこで2016年以降は、前述したように、自治体ごとの電話相談業務を請け負っています。

なお、最初のパートナーと別れたときに、れ組スタジオから抜けたという話をしましたが、最近になって、そういったかつて一緒に活動していたレズビアンコミュニティの人々とも融和して、一緒に活動をするということも増えてきました。

19 命の危機を抱えるセクシュアル・マイノリティ

セクシュアル・マイノリティ支援を始めたきっかけは、やはり自分自身の10代の経験でした。

前述したように、私は15～16歳のころ、自分の性に関する悩みから学校に行けなくなり、引きこもっていました。その間の私は、自分が生きているのか死んでいるのかもわからないような、危機的な状況にありました。おそらく親も心配していたのではないかと思います。当時はセクシュアリテ

ィに関する情報も少なく、親もどうすればよいのかわからなかったため、私は放っておかれました。

私はなんとかそこから抜け出し生き残ることができましたが、抜け出した後には私と同じような経験をしていた・している人はたくさんいるのだと気づきました。私がそうだったように、多くの人は周りから放っておかれ、何の支援も受けられずにいます。一番大変なときに、一番孤独な状態なのです。そして、自死に向かう人も少なくありません。

私の身近な友人のうち何人もが自死・自死未遂をしています。

れ組スタジオを作ったのは、親からの妨害や脅迫への防衛手段だったという話をしましたが、その当時、参加者の親からの攻撃が最も過酷だったと記憶しています。家族からの拒絶や、軋轢に耐えきれずに、自死するメンバーもいました。また、れ組スタジオの活動に初めて参加してくれた人が、次の集まりのときには亡くなっていた、といったこともありました。

現在でもセクシュアリティのカミングアウトがしにくい状況は続いています。れ組スタジオで活動していた1980年代後半～1990年代は、現在以上にカミングアウトはとても困難な時代でした。そのような状況の中で、気づかれないうちに消えていく、亡くなったことすら気づかれない、墓標も立たないセクシュアル・マイノリティが数えきれないほどいることを痛感したのです。自殺統計の中には膨大な量の「原因不明」の死者数があります。その中には少なくない数のセクシュアル・マイノリティが必ずいます。

そういった命を何とか繋ぎ止めたい、セクシュアル・マイノリティが抱える苦悩を可視化したいという思いから、支援活動を始めました。

20 セクシュアル・マイノリティが自死に向かう理由

セクシュアル・マイノリティが自死に至ってしまう理由は、人によってさまざまですが、根底に通じるものとして、社会からの非承認や否定があります。社会からの非承認や否定ゆえに、ありのままの自分のセクシュアリティを黙して語らず、あるときは隠して生きざるを得ません。しかし、隠して生

きることはとても労力が要ります。心の扉を閉ざして、水面下で生きるうちに、風通しが極度に悪くなって空気は淀み、水は濁り、その害が自分に向かっていくのです。例えば、カップルとして交際していてもそのことを社会から隠さなければならないと、二人の間のことを誰にも相談できません。未来が見えないなどの理由で別れに至った場合、別れを告げられた当人は自分を攻撃するようになります。マイノリティというのはぐれ者なのに夢を見たのがバカだったんだ、はぐれ者は幸せになんてなれない、といった社会の見えない声を自分に向けて断罪してしまうのです。

このように、自分のセクシュアリティを隠して生きるというのは、自分を守っているようにみえて、実は自分自身を攻撃している状況であるといえます。私自身も、自分のセクシュアリティを周囲に言えなかったころは、自分はおかしいのではないか、これではだめなのではないか、と責め続けていました。私の場合、確かに身体的には女性なのですが、女らしい仕草や行動は自分にとって「演技」としか思えず、女性として自分にできることは「子どもを産むこと」しか思いつきませんでした。社会の要請と、自分にできることやしたいことが唯一一致したのが、これでした。

セクシュアル・マイノリティの人々の多くは、自己の性自認や性的指向等を抑えて、社会の「型」に自分を無理やりあてはめて生きることを強いられています。今の社会では、男性はこうあるべき、女性がこうあるべきという生き方の「型」のようなものが様々な形で存在しています。自己のマイノリティ性を隠している、クローゼットのセクシャル・マイノリティの人々は、無理やりその「型」に自分を合わせて生きていますが、それを続けていけば、だんだんとひずみが出てきて、心が追い詰められていきます。

2.1 セクシュアリティに関するマイクロアグレッション

最近では、正面からセクシュアル・マイノリティの人々を否定するような言動が、公の場でされることは以前と比べて減っていると思います。しかし、

今でも「マイクロアグレッション」と呼ばれる、セクシュアリティについての差別意識を含んだ細かな攻撃的言動が多く見られます。

例えば、「その女性の方がお待ちです」などと、すぐ人の見かけの性別に言及すること、性別の質問への回答が、たいていは男・女の二択しかないこと。「彼女（彼氏）いるの？」といった、異性愛を前提とした質問をすること。

パートナーのことを「お友達」と言い換えられること。葬儀の場で、遺族としてお悔やみの言葉を言われぬこと。

こういった、悪意はないとしてもセクシュアル・マイノリティを排除するような言動が社会のあらゆる場面で積み重なることで、真綿で首を絞められるように、社会はセクシュアル・マイノリティを承認していないというメッセージとして重くのしかかることになるのです。

2.2 同性婚の必要性

同性婚が法制化されれば、そういった社会の状況は大きく変わるのではないかと考えています。

同性婚という制度があれば、同性どうしても、結婚についても異性愛者と同じ権利を持っている、対等である、ということ、社会的に広く知らしめることとなります。そうすれば、今ほど簡単に、セクシュアル・マイノリティを差別するような言動をすることはできなくなるでしょう。海外で同性婚をしたカップルからは、同性婚をすることで親との関係がよくなった、親族や昔からの友人に、息子や娘の近況を聞かれたときに、堂々と話せて嬉しいそうだ、という報告も聞いていますので、その社会的な支援効果は相当なものだと思います。

もちろん、同性婚が実現したとしても、すぐに劇的に状況が変わるというわけではないでしょう。おそらく、異性の結婚が正当で、同性婚はおかしい、といった主張をする人は、しばらくの間残ると思います。

しかし、少なくとも、同性カップルが、周りに「おめでとう」と言われる対象になるのは間違いありません。「おめでとう」と人から言われることはそれだけで嬉しいことであり、人生の希望に繋がります。もっと言えば、自分のセクシュアリティを発見することは、自分にとってかけかえのない発見であり、同性愛と気づいておめでとう、トランスジェンダーと気づいておめでとう、本来の自分を見つけ出しておめでとう！と祝福されていいことなのです。同性婚の法制化により「おめでとう」と祝福される存在になることはセクシュアル・マイノリティにとって自己否定から自己肯定への転換に繋がるものでしょう。

また、同性婚により（結婚した）同性カップルの関係が、社会に記録として残るということも、大事な点だと思います。

異性のカップルが結婚すれば、当然公的な記録に残ります。また、例えば結婚式をしたり、周りに報告をしたりすることで、周囲の人々の記憶にも残っていきます。たとえその夫婦が離婚したとしても、その痕跡が社会に残ります。

一方、同性カップルの場合は、別れも含めてその存在の痕跡が異性カップルのように社会に残りません。そのことは、同性カップルの関係は社会的に存在しなかったと扱われるのと同じでしょう。記録と記憶はリンクするものです。記録に残らないことは人々の記憶にも残りにくいでしょう。同性カップルは記録されず、人々の記憶にも残らず、過去にも現在にもないものとされては、その歴史も途切れてしまい、よきことは続け、悪しきことは変える、という積み重ねと見直しの機会さえ奪われてしまいます。そういう状況を変える必要があります。その意味で国や社会の記録に残すという点でも、社会的に認知されていないものから認知されるものになるというのは、大事なことだと思います。

2 3 最後に

「個人的なことは、政治的なこと」という女性解放運動の格言にあるように、私自身の根っこには、異文化体験から来る多様性へのこだわりと、それを個別の体験にとどめるのではなく、多くの人を通る社会的な道筋であることをはっきりさせたい、という思いがあります。それは、孤立をふせぐための、とても有効な手段だからです。

そういう面で、セクシュアル・マイノリティの問題に限らず、その他にもマイノリティ性の高い経験をするひとびとに、一律に悔しい思いを強いることなく、どうやって受け入れ、手を携えてともに暮らしていくか、というのが日本という国にとって、とても重要な課題だと感じています。うちには、家族に外国籍の者が二人もいるので、外国人の受け入れに関する課題もたくさん目につきますし、北海道に住み始めたいまは、アイヌ民族の人たちの歴史的な処遇についても同じような問題意識をもって見守っています。

なかでもセクシュアル・マイノリティの問題は、自分自身も当事者であることから、生きているうちにまずはそこをなんとかしなければという強い思いがあります。気づかれないままに消えていくセクシュアル・マイノリティをこれ以上増やしてはなりません。

同性婚の実現によって、多様な人々が、平和で対等に暮らせる方向に向けて、一歩前進するのは明らかです。すべての人の多様性を認め合える社会に一歩近づくことを願っています。

以上